連載コラム

みずき野と その周辺の 植物と昆虫

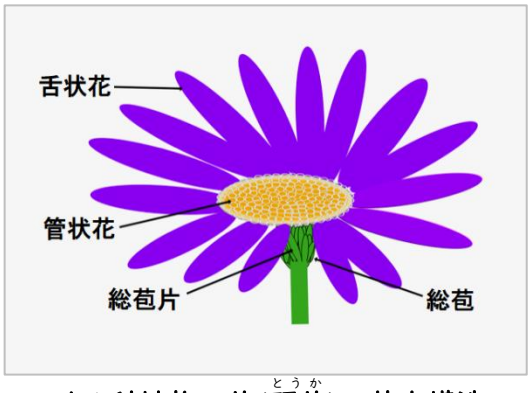
第 74 回

キク科植物の花（5）

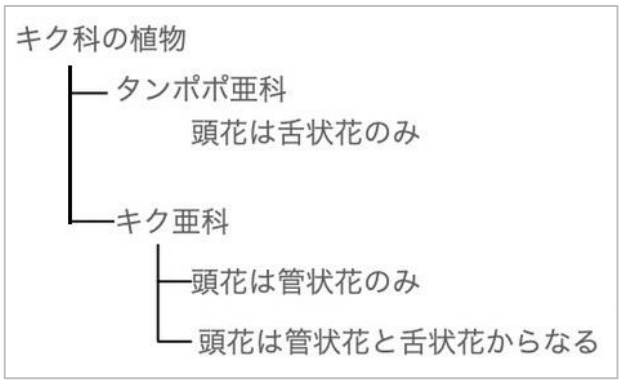
～ キク科キク亜科（あか）の植物 ④ ～

本吉 總男（もとよし ふさお）　2024 年 4 月

「キク科植物の花」シリーズの最終回です。今回は、ツワブキ属、キク属、シオン属植物を載せます。前回どおり、キク科植物の花の構造とキク科植物の分類の詳細を説明する代わりに、これまで使っていた模式図を載せておきます。なお、キク科については、昨年中に終える予定でしたが、著者がしばらく体調を崩しており、大変遅くなってしまいました。今回掲載するのはほとんどが秋の花です。今は春ですが、秋の晴れた日に咲く清々しい花たちを思い浮かべていただけたら幸いです。



キク科植物の花(頭花)の基本構造



キク科植物の分類

29　ツワブキ（ツワブキ属）

ツワブキは本州中部以西、四国、九州、沖縄と東アジアの温帯および亜熱帯の海岸近くに主として分布する多年草ですが、園芸品種がつくられ、欧米でも栽培されています。みずき野では文化財公園下の花壇に栽培されています。茎の長さは50～70センチほど、その先にフキの葉に似た丸い大きな葉をつけます。ツワブキとは葉に艶のあるフキの意味だそうです（週刊朝日百科「世界の植物」5号）。下記の写真は10～12月ごろ。文化財公園は私の家から近いので晩秋から初冬には、ツワブキの蕾、頭花、冠毛のついた種子などの観察を楽しんでいます。

10月中旬

ツワブキ　みずき野文化財公園下花壇

11月上旬

2月上旬

30　キク、リュウノウギク、イソギク（キク属）

キクは皇室の御紋章に使われることや、重陽（ちょうよう）の節句（旧暦9月9日）に宮中で行われた菊水の宴、楠木正成などが家紋とした著名な菊水紋、各地での菊の品評会や菊人形などの印象から、キクは日本在来の植物のように思われがちですが、実際は中国から伝来したものです。週刊朝日百科「世界の植物」4号によれば、現在の菊の祖先は約1500年前に、中国に野生するチョウセンノギクとシマカンギクが交配したものと推定されているようです。その後中国では長い期間にわたって色や形がとりどりの多数の品種がつくられたました。

日本への渡来はいろいろな説があるようで、柳宗民著『カラー新書　日本の花』（ちくま新書）には奈良時代の末頃とあり、週刊朝日百科「世界の植物」4号には鎌倉、室町時代とあります。北村四郎選集 III『植物文化史』（保育社）によると、元禄以降種子を播（ま）くことが行われ、享保年間にすぐれた品種ができたことが記録されているそうです。明治になると、日本各地でキクの栽培が盛んになり、また、赤坂離宮や新宿御苑で多くの品種改良が行われました（週刊朝日百科「世界の植物」4号）。キクには大菊、中菊、小菊があり、それぞれに多くの品種がつくられています。これらの詳細はあまりにも煩雑になりますので省略します。

ヨーロッパでもキクが栽培されています。フランス革命の年（1789）、中国からフランスにキクが入り、ヨーロッパ各地で栽培されるようになり、主として切花用品種がつくられ、これらが日本に入り、大量生産に向く品種が生まれました。キクは短日植物（たんじつしょくぶつ）（秋分の日以降、日が短くなるにつれて花の芽ができる植物）なので、温室で光の長さを調節すると、一年中花を咲かせることができます。これによって、どの季節でも切花を買うことができるようになりました。キクは本来祝宴の花なのですが、現在は仏花というイメージが加わりました。

キクは庭で育てることが多いと思います。散歩道で見ることはあまりありませんが、取手市上高井地区の南の畑地の隅に植えられた何品種かのキクを見たことがあります。

キク　11月上旬　いずれも取手市上高井地区

リュウノウギクは本州、四国、九州に分布する日本固有の多年草で、高さは40～80センチ。舌状花は白色、管状花は黄色です。花は10～11月に見られます。リュウノウギクの頭花はハマギク、コハマギク、ノジギクの頭花とよく似ていますが、葉の形で区別できます。みずき野で見られるものは栽培品種です。

リュウノウギク　11月上旬
みずき野中央広場花壇

イソギクは本州南部の海岸地帯に見られる多年草で日本固有種ですが、みずき野で見られるものは栽培品種です。この品種の舌状花は筒状で頭花の周辺に見られます。舌状花も管状花も黄色で、花期11～12月頃です。

イソギク　11月上旬
みずき野中央広場花壇

31　シオン、ヨメナ、ノコンギクなど（シオン属）

シオン属の代表種であるシオンは在来の多年草。キク科の中では大型の植物で、高さ150～200センチになります。花は紫色で美しく、漢字では「紫苑」と書き、その名もこの植物の美しさを引き立てます。よく庭に植えられていますが、野生しているものは激減し、環境省により絶滅危惧種に指定されています。

シオン　9月中旬
取手市貝塚地区

ヨメナは在来の多年草で、地下茎によって群れをつくります。舌状花は薄紫で群れて咲く可憐な花です。キク科植物のひとつで、茎の高さは60～100センチほど、花期は7～10月頃です。やや湿った土地に普通に見られる植物でその由来についてははっきりしませんが、大陸から朝鮮半島を経て日本に入ったオオユウガギクと中国中南部から入ったコヨメナとの交配によってできたものとの説があります（週刊朝日百科「世界の植物」3号）。子どもの頃、荒川区に住んでいましたが、春には父に連れられて、渡し

ヨメナ　11月上旬　守谷市本町地区

ヨメナ　10月中旬
取手市市之代地区

船で隅田川と荒川を渡り、土手や田の畦道（あぜみち）にヨメナの若芽を摘みに行きました。まだ東京にも摘み草ができる場所（足立区）があったのです。ヨメナはご飯に炊き込んで食べました。懐かしい思い出です。

ノコンギクは日本固有の多年草です。高さは50～100センチ位で、花期は8～10月ごろ。ヨメナと同様。地下茎で増え、群れをつくります。図鑑などによると、ノコンギクはきわめて普通に見られる植物とありますが、みずき野の周辺にはさほど多くは見かけません。

ノコンギクを改良した栽培品種をコンギクといいます。高さ40～60センチ位、花期は8～12月。舌状花（ぜつじょうか）は青紫色の美しい頭花（とうか）を咲かせます。いつ頃できた品種か不明ですが、古くからあったようです。みずき野では第1調整池の花壇で見たことがあります。写真はわが家の庭で撮ったものです。

ノコンギク　11月上旬　守谷市本町地区

コンギク　12月上旬　わが家の庭

シラヤマギクは在来の多年草です。高さは 100 センチ前後。花期は8～10月。舌状花（ぜつじょうか）は白色で、ヨメナやノコンギクとは趣きが違いますが、繊細で上品な姿に魅せられます。

シラヤマギク
10月上旬　守谷市本町地区

ミヤコワスレは花壇によく見られる栽培品種で、野生種で多年草のミヤマヨメナを改良したものです。ミヤマヨメナは高さ20～50センチ位で、花期は5月～8月。本州、四国、九州に産する日本固有種です。みずき野周辺には見当たりません。神代植物公園で撮った写真を載せておきます。

ミヤコワスレ
5月下旬　みずき野中央広場花壇

参考写真　ミヤマヨメナ
5月下旬　神代植物公園

最後に、外来種のシオン属植物ヒロハホウキギクを加えておきます。ヒロハホウキギクは北アメリカ原産の一年草で、高さ　100　センチ前後、花期は8～10月。同じく北アメリカ原産のホウキギクと似ていますが、葉が広く、花が薄いピンクなので、葉が狭く花が白いホウキギクと識別できます。写真の花は特に花の色からヒロハホウキギクと判定しました。ホウキギクはみずき野周辺には見当たりませんでした。

ヒロハホウキギク
10月中旬　守谷市本町地区

余談：　野菊（のぎく）に寄せて

植物学ではノギクという名の植物はありませんが、ノギクという名は私たちにとって、なじみ深いものです。ノギクは通常漢字の「野菊」が使われますので、以下は野菊と書くことにします。野菊に最も相応しい花は、ヨメナとノコンギクと思っています。

野菊という名がいつ頃から使われたものかわかりませんが、芭蕉の句があります。

なでしこの暑さわするる野菊かな　　松尾芭蕉（旅館日記）

ナデシコはカワラナデシコのことと思いますが、秋の七草のひとつとはいえ、花期は6～9月ごろ、まだ暑さの残る季節です。ヨメナやノコンギクはそれよりあとに開花しますから、芭蕉の句もわかるような気がします。野菊の花はナデシコの花より涼しげなこともこの句から感じられます。

野菊といえば、最も印象に残っているのは、明治39年「ホトトギス」に発表された伊藤左千夫の小説「野菊の墓」です。「野菊の墓」はネット上の青空文庫で読むことができます。あらましを書いておきましょう。

> 矢切の渡しを渡った先の矢切村の旧家に住む斉藤政夫と病弱の母、物語は主人公の政夫が一人称でつづります。矢切の渡しにほど近い市川に住む政夫の 2 歳上の従姉、戸村民子は毎日のように政夫の家に政夫の母の看病や手伝いにきます。話は政夫満 13 歳、民子満15歳のときから始まります。やがて、年を経るにしたがい、二人は深い相思相愛の関係になります。政夫は民子を野菊のような人だと思い、民子は自身が野菊の生まれ変わりだというほど野菊が好き、という場面があります。二人の関係に縁者の干渉が厳しく、それを気にした母は政夫 15 歳のとき、中学に行くように仕向け、矢切の渡しで政夫は民子と別れます。これが二人の永久の別れとなりました。民子は無理に嫁に行かされ、早産で流産し、あとの肥立ちが非常に悪く、回復せずに死んでしまいます。死んだ民子の胸には紅絹（もみ）のきれに包まれた政夫の写真と恋文が抱かれていました。それを見て、政夫の母や民子の両親や祖母は政夫と民子の深い仲を知って、二人を無理に引き離したこと後悔し、政夫に詫びます。民子の墓を訪れた政夫はそこに民子が大好きだった野菊が茂っていることに気づきました。民子は野菊の中に葬られたのでした。
>
> 注：紅絹（もみ）のきれ＝紅で無地に染めた絹布（広辞苑）

この物語は昭和 30 年に木下恵介により「野菊の如き君なりき」として映画化され、その後もこの物語をもとに映画やテレビドラマがつくられました。

もうひとつ、野菊といえば思い浮かべるのは、文部省唱歌「野菊」（作詞：石森延男　作曲：下總皖一）です。

遠い山から吹いて来る こ寒い風にゆれながら、 けだかく、きよくにおう花。 　きれいな野菊、 　うすむらさきよ。	秋の日ざしをあびてとぶ とんぼをかろく休ませて、 しずかに咲いた野べの花。 　やさしい野菊、 　うすむらさきよ。	しもがおりてもまけないで、 野原や山にむれて咲き、 秋のなごりをおしむ花。 　あかるい野菊、 　うすむらさきよ。

ネット上を「野菊　YouTube」のキーワードで検索すると、この曲をいろいろな歌手の歌声で聴くことができます。